研究報告

過疎地域住民の生活ニーズ調査－過疎地の小売戦略

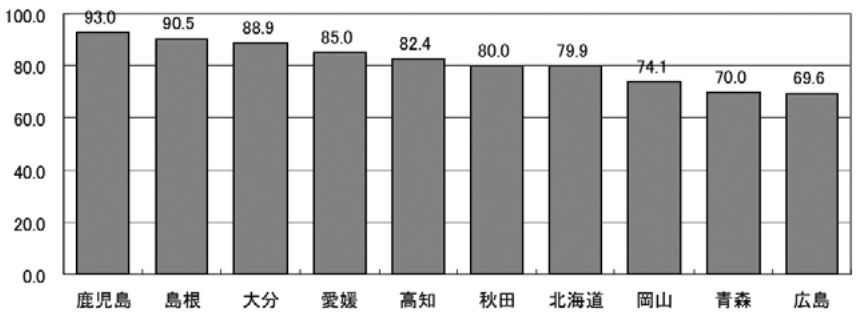
鹿児島国際大学大学院 経済学研究科 専任講師　兼　子　良　久
生活協同組合コープさっぽろ マーケティング室　調査グループ　星　野　浩　美
学習院大学 経済学部 教授　上　田　隆　穂
学習院大学 経済学部 教授　青　木　幸　弘

1. 研究の背景と目的

北海道赤平地区では過疎地において買い物難民が発生しており、その多くが高齢者である。現在この赤平地区では生協であるコープさっぽろが「お買い物バス」を無料運行し、地域住民に買い物の足を提供している。利益の出る仕組みとしては以下の様な仕組みがある。このお買い物バスの目当てが中央にある大きな病院であり、地域の住民は高齢者を中心としてお買い物バスでほぼ毎日この病院を訪れる。そしてこの病院の隣にコープさっぽろの店舗があり、従来地域外に流出していた買い物需要をほぼ取り込むことが可能となった。この結果、お買い物バスを無料としても黒字を出すことができたのである。

長引く不況に加え、人口の減少や少子高齢化に起因する地方の過疎化は、地域住民の生活に深刻な影響を与えている。地域住民の安心や安全の確保のためにも、地域活性化は過疎に苦しむ日本の僻地の大きな共通問題となっている。図 1 は、市町村における過疎地比率が高い順に上位 10 位までの地域を示している。過疎地比率が最も高いのは鹿児島の 93%であり、コープさっぽろのサービス提供地域の北海道でも約 8 割の過疎地比率となっている。

図 1. 過疎地比率の上位地域　　単位：%



出典：国立社会保障・人口問題研究所

過疎地の多くは、人口に占める高齢者の比率が年々高くなっている。例えば、総務省が 2011 年

度にとりまとめた過疎地に関する調査[i]では、全国の過疎地の約 15%が限界集落（人口の半数以上が 65 歳以上の高齢者）となっており、1999 年実施の調査結果と比較すると限界集落の数は倍になっている。このような高齢化問題に対しては、高齢者のＱＯＬ（Quality of Life）と生活満足度の観点から議論されることも多い。個人の経済状態がよければ高齢者の生活満足度は高まる傾向にあるが（eg., 古谷野 1993)、必ずしもお金だけが生活満足度を向上させるわけではない。多くの先行研究では、高齢者の生活満足度と社会活動との関係に注目をしている (eg., 香川ほか 1998；岡本 2008；金子 2009；竹内ほか 2011)。これらの研究では、高齢期を迎える人にとって、社会活動が積極的であるほど、生活満足度が高くなるということが指摘されている。地域活性化への取り組み方は、特産品の開発・観光振興・農業振興や企業誘致など多様であるが、地域の発展や活性化のためには、地域住民の生活の質向上にも目が向けられなければならない。なぜならば、地域住民の生活の質は、地域経済が発展するための源泉でもあるからである。

地域住民の生活の質向上については、元来、地方自治体がその役割を担ってきた。しかし、例えば「お買い物バス」のケースは、地域活性化における民間企業、特に地域に根ざした小売業の役割の重要性を示唆している。スーパーマーケットに代表される小売業は、人が生活する場所には必ず存在し、住民の生活に深く関わっている業態ある。したがって、地域住民の生活に関わるようなサービスの提供や社会貢献活動は、小売業が適した業態であろう。地域への社会貢献は、住民の生活満足度の向上によって、最終的には企業の収益にも反映されるはずであり、小売業にとっても収益上のメリットもある。ただし、生活満足度の向上は、住民のニーズをベースにしたものでなければ達成は難しい。例えば、お買い物バスの運行は一部の住民のニーズを満たしたものに過ぎないかもしれない。本研究は、北海道の過疎地を対象に、主にパーソナルインタビューと質問紙調査から過疎地域の住民ニーズを探り出し、住民ニーズを基にした地域貢献を兼ねた小売戦略の方向性について検討することを目的とする。

2. 北海道の過疎地の現状と特徴

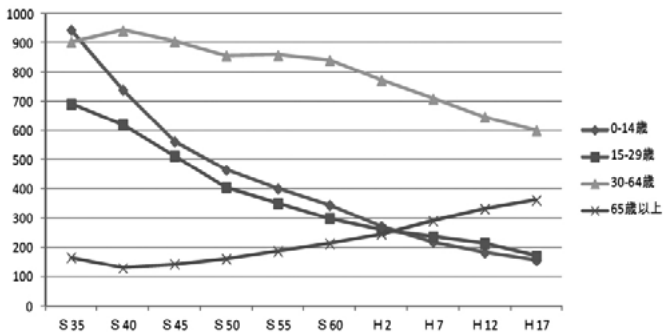
過疎地域自立促進特別措置法の第 2 条では過疎市町村を、35 年間の「人口減少率が 33% 以上」「人口減少率が 28% 以上で、高齢者比率が 29% 以上」「人口減少率が 28% 以上で、若年者比率が 14% 以下」のいずれかに該当する地域と定義している。図 2 は、この定義に照らし合わせたときの、北海道における過疎地の分布状況である。過疎地域は道内に広く分布しており、総面積に占める過疎地域の面積比率は 75.2%となっている。また、過疎地の人口密度は 20.6 人であり、全道平均の 67.4 人と比較すると 3 分の 1 以下である。また、過疎地における年代比率は年々上昇する傾向がある（図２）。道の調査が実施した調査によれば、道内の限界集落は、集落全体の 8.6%を占めており、今後、消滅の危機に直面するのは 160 カ所（限界集落の約 3 割）に及ぶとされている[ii]。2008 年に道でま

とめた「新たな過疎法の制定に向けた北海道の考え方」では、①北海道の過疎地では、全国を上回るスピードで人口減少・高齢化が進んでいる　②人口減少傾向の強まりにより、札幌都市圏への人口の一極集中が進んでいる　③過疎地における人口減少は、主にはその地域における就業機会の減少が強く影響している。そのため、過疎地における雇用の確保が重要課題となっている。　④過疎地における人口減少により、行事・イベントの開催が困難になってきており、冠婚葬祭等の日常生活扶助機能も低下しつつある　といった現状の北海道の過疎地が抱える問題点が指摘されている。このような問題に対して、北海道では、過疎地対策措置法等による国の支援を受けて、過疎地対策を行なっているものの、経済情勢の変化とともに、過疎地における雇用の場の減少、過疎地におけるサービス水準の維持の困難さから、人口減少が続いているのが実情である。

図 2. 北海道における過疎地域の分布状況　※網線は過疎地を示している

出典：北海道過疎地域自立促進方針 (平成 22 ～ 27 年度)

図 3. 過疎地における年代別の人口推移（千人）



出典：北海道過疎地域自立促進方針 (平成 22 ～ 27 年度)

本研究の事前調査・プレインタビュー・質問紙調査の主な対象地域となった「道央広域連携地域」は、1960 年から 2005 年の 45 年間で人口減少率は 49.0％であり[iii]、道内の他の地域と比較すると人口減少率が最も大きい地域となる。以下に、本研究の主な調査対象地域の概況を示す。

・夕張市

炭鉱の町として栄え、最盛期の人口は 12 万人の人口を数えた[iv]。国の石炭政策の後退により人口は激減。現在の夕張市の人口は 1 万 1,000 人で、全国で 3 番目に人口が少ない市となっている。また、人口密度は全国の市で最も低い。また、夕張市は、2007 年に財政再建団体に指定され財政破綻している。

・赤平市

夕張市同様、炭鉱の町として栄え、最盛期は 6 万人の人口を数えた。石炭産業の衰退とともに、人口は減少し、1994 年には最後の一山が閉山した[v]。現在の人口は 1 万 3,000 人で、全国で 4 番目に人口が少ない市となっている。

・岩見沢市

周辺の炭鉱の開発とともに石炭輸送により栄えた。岩見沢市の北部と南部に位置する北村・栗沢地域が過疎地となっており、市域 481.1k ㎡のうち、276.4k ㎡の 57.4％を占めている。2 地域の総人口は 1 万 500 人で、最盛期と比較すると 69.3％減少。また、若年者比率にあっては 10.5％となっている[vi]。

・厚岸町

厚岸町は面積の 57％が森林である。国のエネルギー政策の変革による鉱山閉鎖や、沿岸漁業の主魚種であったニシンの群来がなくなったことが要因となり[vii]、最盛期の 2 万人の人口は 1 万 1,000 人となり、42％程度の人口減少となっている。

・仁木町

最盛期には 8,300 人の人口を抱えたが、鉱山の休止により人口は 3,800 人まで減少。高齢化比率は 30.7％と著しく高齢化比率が進行している[viii]。

・平取町 / むかわ町 / 厚真町

平取町は面積の 80％以上が森林である[ix]。人口は 6000 人であり、人口密度は全国 748 町のうち 726 位。むかわ町は人口 1 万人、厚真町は人口 5,000 人である。厚真町は全国で 2 番目に人口密度

が低い町となっている。

表 1. 人口と人口密度 1 [x]

	人口	人口密度
夕張市	10,925（785 位）	13.8（787 位）
赤平市	12,637（784 位）	94.6（692 位）
岩見沢市	90,153（294 位）	185.8（581 位）

単位：人　（　）内は全国の市における順位

表 2. 人口と人口密度 2

	人口	人口密度
厚岸町	10,631（415 位）	14.1（684 位）
仁木町	3,801（680 位）	22.3（630 位）
平取町	5,597（617 位）	7.5（726 位）
むかわ町	9,747（448 位）	13.5（689 位）
厚真町	4,892（651 位）	12.0（698 位）

単位：人　（　）内は全国の市における順位

3. 研究の方法

本研究の目的は、北海道の過疎地を対象に、住民ニーズを探り出し、小売による地域貢献を兼ねた小売戦略の方向性について検討することである。移動販売車は、食料品など生活必需品を取り扱う移動スーパーとして、過疎化に住む買い物難民の暮らしを支えている。研究にあたっては、まず、移動販売車を追跡することにより、過疎地住民の実態を把握することから始める。続いて、過疎地住民に対してパーソナルインタビューを行う。パーソナルインタビューの目的は、過疎地住民の生活ニーズに関する仮説を抽出することにある。この仮説に基づいて質問紙調査の設問を設計する。そして、質問紙調査により、定量的に過疎地域の住民の生活ニーズを抽出する。質問紙調査は、選択形式と記述形式の設問から構成される。記述形式の設問に関しても、記述内容の構造解析を行うことにより、定量的な検討を行う。最後に、これらの結果を基に、過疎地において小売が、どのような戦略を立案できるかについて検討したい。

4. 事前調査

コープさっぽろでは、空知・上川・留萌エリア／石狩・後志エリア／渡島・檜山エリア／胆振・日高・十勝エリア／釧路・北見エリアの5エリアで、27店が移動販売車サービスを提供している。移動販売車事業は、2010年から本格始動し、現在では、全道で52台が運行している。取扱い商品は、日用品・魚類・肉類・菓子・飲料・調味料などであり、商品点数には制限があるものの、日常生活に必要なものは一通り揃えている。各地域へは、毎週決まった曜日に同じコースを同じ時間で周り、停車位置に到着後、音楽を流して到着したことを近隣住民に知らせる。移動販売車が周る回数は、週1回の地区も、週2回の地区もあるが、全体としては週2回の地区が多い。調査は、2011年10月12日～13日で実施し、コープさっぽろの夕張清陵店・余市店における移動販売車を追跡することにした。また、利用客には、若干のインタビューも行っている。

追跡したコースに関して言えば、通りは閑散としており、ほとんど人影はなく、周辺にも商店を確認することは出来ない。バスの運行状況を確認しても、1日に数本しか走っておらず、自家用車がなければ生活が厳しい地域である。移動販売車の到着後に、住民が通りに顔を出し始める。また、利用客の要望に応じて、利用客の自宅の前や勤務先の前で停車することもあった。移動販売車の利用客は60代以上が多くを占め、利用者には若い層はほとんどいなかった。また、独居もしくは夫婦2人世帯が中心であった。各停車場所における利用者数は1名～10名ほどとバラつきがあったが、特に余市においては、公営住宅周辺における利用者数が多い傾向が見られた。

移動販売車の停車場所（公営住宅周辺）

利用者に高齢者が多いのには、いくつかの理由が考えられる。1つ目は、そもそも過疎地は高齢者比率が高いため、結果的に高齢者の利用者が多くなっているということである。2つ目は、利用者の多くは、自家用車を所有していない。高齢になると自家用車の運転をしたくてもできない状況にもあり、移動販売車に頼らざるを得ないとも考えられる。移動販売車以外での買い物に関しては、30キロ以上離れた場所まで行っていた人もいた。しかし、利用者に話を聞いてみると、「それほど不自由は感じていない」「昔からこうしてきた」との回答が多かった。不自由な買い物環境を当たり前とした生活をしているため、不満が顕在化しにくいのではないかと考えられる。ただし、移動販売車の利用者は、明らかな買い物難民であり、移動販売車がなければ、日常生活に支障を来す可能性が高い人々である。利用客へのインタビューの中で、買い物については不便を感じていない一方で、今後一人で生きていくことへの不安を話す人が多かった。子どもたちも、何かあった時にすぐに来てもらえる距離には住んでおらず、生活への不安がいつも付きまとっているようであった。

移動販売車の利用者は、買い物だけが目的ではなく、他の利用客とのコミュニケーションも目的としているように思われた。移動販売車の中は、3、4名が入れるくらいのスペースがあり、利用客同士で会話をしながら買い物をしていた。独居も多く、1日誰とも会話しないこともあるとのことだった。したがって、移動販売車を介した近隣の人々とのふれあいが、日々の生活の中で重要な位置を占めているようでもあった。利用客が買い物する量は多くはなく、投下金額も2000円～3000円程度であり、それほど多くの物を購入してはいない。従って、移動販売車のコストを踏まえれば、1つのルートを一周しての利益はそれほど大きくはない。移動販売車に関しては、コープさっぽろの社会貢献としての側面が大きい。ただし、移動販売車によるサービスの提供は、後に質問紙調査でとったアンケートでも、移動販売車に感謝する旨の記載が多く見られ、コープさっぽろへのロイヤルティの向上に繋がっていた。

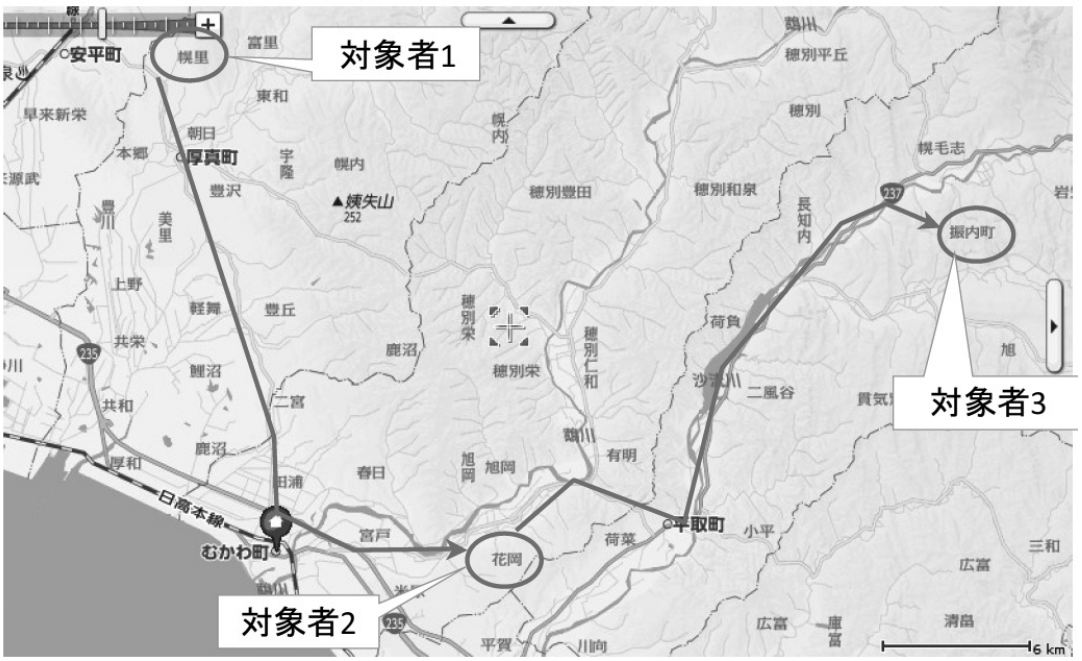
事前調査により過疎地の状況を確認した。また、機会を見て、若干のインタビューを試みたが、デモグラフィックや買い物に関する質問が中心となっている。したがって、続くパーソナルインタビューでは、事前調査の結果をインタビュー項目へ反映させるとともに、過疎地住民の生活全般に関する質問を中心に構成した。

5. パーソナルインタビュー

5-1. 調査の目的と調査の方法

パーソナルインタビューの目的は、質問紙調査を行うにあたっての仮説を抽出することにある。インタビュイーは、北海道の過疎地に居住している高齢者を条件としている。インタビュイーのリクルーティングは、北海道の調査会社を経由して行われ、それぞれ厚真町・むかわ町・平取町に居住している3世帯（独居含む）が対象として選定された（図4）。また、リクルーティングには機縁法が使われた。インタビューは、2012年2月18日に実施した。インタビューは1時間から1時間半の間で行われ、インタビュイーには、インタビューの目的、話された内容は研究目的のみに使用すること、会話は後の分析のために録音することを伝えた。また、インタビューの際には、インタビュアーを含め、学習院大学の関係者3名が同席し、会話の内容によって、都度、インタビュイーに質問を投げかけた。

図4. インタビュー対象者の居住地



ケース1：対象者1（厚真町居住）のケース

対象者1は70代の夫婦で農業に従事しており、牛を数頭飼っている。夫婦のみで暮らしており、子供は苫小牧に2人いる。牛を飼っている関係で遠出が難しいため、子供から会いにくることが多い。生活スタイルとしては、4時くらいに起床して6時に朝食、6時に夕食後就寝であり、ほぼ牛の世話で1日が終わるという生活をしている。対象者1の家庭では、車は所有しておらず、夫はバ

イク利用、妻は自転車かバスを利用している。対象者１の居住地域でも高齢化が進んでいる。

＜この辺は、世帯数が減っていますか？＞

妻）減っていますね。小さい子どももほとんど。遠くにひとり今年入る子居るけど。
夫）（小学校も）合併しているからね。学校も遠い。スクールバスで通っている。
妻）だんだん家が減っていって、空家が増えている。寂しくなるねぇ。

小・中学校の合併は、子供の通学の不便や親の負担となるため、若い層は便の良いところへ住む傾向がある。このような学校数の減少も、過疎地の高齢化を加速させる要因ともなっている。対象者１は移動に不便な場所に住んでいるが、ほとんどはバイク移動で済ましている。しかしながら、現状は、夫婦とも日常生活にはあまり不便を感じていない。

＜日頃生活されていて不便に感じることはありますか？＞

夫）あまり。たいして不便ちゅうこともないけど。
妻）外に出なくなったもんね。70 歳くらいから。前は結構出て歩いてたけど。
夫）あまり出掛けることはない。
夫）いるものがあれば、ＦＡＸで頼む。
妻）お花をカタログで。電話だと喋らなきゃならんけど、FAX だとね書いて送れば。FAX は無いと困る。

過疎地での生活に慣れている結果とも言えるが、不便を感じていない要因として、そもそも高齢になり外出の回数が減ったこと、ＦＡＸによる買い物を比較的活用していることが挙げられる。ＦＡＸは、農協側が農協の会員への連絡用に各家庭に提供したものである。ＦＡＸ注文は日用品が対象ではないが、食べ物を含む日用品については、1時間程度かけて夫がバイクで買い物をし、妻は特に買い物に出かけるということはしないということであった。また、日用品については、外出しなければならない何かしらの用事がある場合に、ついでにスーパーマーケットに立ち寄って買い物をしている。

＜普段のお買い物は、どうされていますか？＞

夫）必要に応じて行くという感じです。バイクで行きます。1時間くらいで往復できるから。買い物して帰ってきて往復して1時間くらい。

＜日頃のお買い物では、どんなものを買いますか？＞

妻）夏は自転車、冬はバスだね。

夫）用事がいろいろあるから、それに合わせて買い物もやるような。農協とか役場とかそういうとこに行くついでに。

妻）医者の帰りに買い物するとか。

このような生活は、年をさらに重ねれば難しくなってくると思われる。実際、スーパーマーケットへは往復1時間ほどかかるため、例えば、夫が病気になるなど外出が困難になった場合には、買い物も難しくなるだろう。しかしながら、将来的な不安については、それに関する発言はほとんど見られなかった。居住地域は、農協のサービスに加えて、買い物サービスが始まっていることも背景にあるように思われる。

＜この辺は、お買い物バスとかは来ないですか？＞

夫）NPO法人の買い物サービスとか。その法人の代表が隣にいるもんだから。まぁ利用はしてないけど。

＜お買い物のサービスはいつぐらいから始まったのでしょうかね？＞

夫）去年か、おととし

＜この周りで利用される方も多いですか？＞

夫）いると思うけどね。自分では使ってないから。

一方、余暇活動については、夫婦とも趣味は持っておらず、テレビを見るのが楽しみであるとしている。

＜お散歩とかは行かれますか？＞

夫）うちらは、やってないのね。

妻）うちらなんも趣味もってないから駄目だもんね。

＜一日の中で、楽しみにしている時間はありますか？＞
夫）まぁテレビ見る時間かな。
＜テレビはいつも何時くらいに？＞
夫）時間っていうのもないけどね。
妻）テレビもね、だんだんと面白くなくなってきて。

＜奥さまは、ご自分の畑で野菜を？＞

妻）そうだね、畑とか、花の方が多いね
＜どんなお花を？＞
妻）その草花とかダリアとかね、いつも同じようなものしか作ってない
＜それは、農協に出荷されたりするんですか？
妻）いやいや、出荷でない。
＜お花は、何年も前から作ってらっしゃるんですか？＞
妻）そうだねぇ。野菜作っても食べきれないから、結局花の方へいっちゃうのね。
＜野菜は、ご自分で食べられる分だけ？＞
妻）だいたい友達にあげる程度で、別に出荷もしないし。そんな立派なものの作ってないから。

最終的に、対象者１に関しては、生活に対する不満や不安に関する発言はほとんどなされなかった。二人ともこれといった趣味は持っていないとしているが、夫は１日牛の世話をしており、妻は畑で野菜や花を育てている。外出はほとんどしないといっても、暇を持て余していたり、１日中、家の中でこもっているという状況にはなく、少なくとも現在のところは、夫婦とも外で活動をしている時間が多い。生活に対する不満が顕在化していない背景には、この生活に慣れているという事以外に、何かしらの活動をし、１日の時間を有効に活用できている状況にあるためとも考えられる。

対象者２（むかわ町居住）

対象者２は 85 歳の独居老人（男性）であり、２年程前に妻が他界している。以来、一人暮らしを続けている。猫・フナを飼っており、それらの世話をしながら、６時前に起床し７時に朝食、午前中は散歩、昼食後にテレビを見て、夕食後、10 時前には就寝という生活を送っている。子供は３人おり、正月・ゴールデンウィーク・お盆に戻ってくる。

この地域でも小学校が閉鎖し、子供の数が減少していく傾向にある。また、若い人たちの流出も起こっており、高齢化が進んでいる。

＜・・・大きいお店は苫小牧の方にあるんですか？＞

男性）苦小牧は大きい店は沢山あるよ。苦小牧の周辺に若い人たちが土地買って、住宅を建てているから。若い人達は苫小牧に多いよ。田舎は若い人はいないけどね。

＜じゃあ、子供さんとかは少なくなってきましたか？＞

男性）小学校？こちらには子供が少ない。ここから一キロ先に小学校があったが、閉鎖になって４，５年になるかな。

＜閉鎖になっているんですね＞

男性）生徒がいなくて、学校を止めてしまった。そして、ムカワの学校と合併した。スクールバスで通っている。

この地域は買い物をする場所が少なく、対象者２は 10 キロ離れた場所へ自家用車で買い物に行っている。1 週間に 1 度の買い物であること、また、生活に対する慣れのためか、現状ではその生活に不便は感じていない。しかし、一人暮らしであることと、スーパーマーケットまでの距離は、今後に不安を感じている要因となっている。この地域には対象者１が住んでいる地域のような買い物サービスはなく、移動販売車のようなサービスなどがあったら良いと発言している。

＜買い物に行ったり。どこら辺まで＞

男性）ムカワ。ここから 10 キロくらいあるんだけどね。車の免許を持っているもんだから。

＜いつもどこで買うか決まっていますか？＞

男性）だいたい決まっているね。生協。あとは農協の店。

＜だいたい、どのくらいの間隔でお買い物に行っていますか？＞

男性）そうだね。行かないときは一週間もいかないけども。用事あるときに、そのついでに買ってきたりして。

＜お買い物などで、不便なこととはありますか？＞

男性）不便はないね。動けなくなったら、昔みたいに物売りが来てくれる人がいるといいんだけども。昔は買い物に行かないで、移動販売車が来るのを待っていたんだけどね。今は行けるけど、でも行けなくなったときを考えると心配だ。

対象者１と同様、自宅には農協から提供されたFAXが備え付けてあり、FAXを通じたやりとりに関しては日常的に行っている。ただし、携帯電話の利用に関しては、ハードルが高いと考えている。

＜上にあるのはFAXですか？＞

男性）あれ（FAX）は農協の組合で全部つけている。
＜農協から連絡があるとFAXで？＞
男性）あるよ。農協の組合員になっているから。
＜どんな連絡が来るんですか？＞
男性）申し込みとは、肥料などの申し込みなど。
＜携帯電話は使ってみたいなと思いますか？＞
男性）便利だなと思うが使い方がわからない。もう、携帯電話の時代だもんね。記憶力がなくて覚えられない。
＜電話で申し込みすることは結構あるんですか？＞
男性）お茶とかは、電話で申し込んでいる。

対象者２は趣味を持っておらず、猫やフナの世話をして１日を過ごしており、外部とのコミュニケーションの機会は非常に少ない。外に出てもあまり同年代の人には会わないという。楽しみはテレビを見るくらいであり、外との接触はますます減少していく傾向にある。

＜一日の楽しみは、どんなことがありますか＞

男性）趣味がないので。パチンコもしないし、競馬もしないし。テレビを見るくらいのものかな。

＜普段、会ってお話される方は周りにいらっしゃいますか？＞
男性）あまりいないね。
＜お散歩のときに。すれ違ったりするときには？＞
男性）運動して歩く人はいない。60 代くらいの人は運動して歩かないから。
＜周りの友達は、冬とかはどういう風に過ごしていますか？
男性）大体似たようなことをやってるんじゃないか。

コミュニケーションの機会はもとから無かったわけではなく、数年前まで仲間内で旅行に頻繁に行っていた。しかし、妻を亡くしてから、旅行へ行くことはなくなった。対象者 2 は、配偶者の他界をきっかけとして、コミュニケーションの機会が少なくなったという。特に過疎地の場合には、人口が少ないことも背景にあり、コミュニケーションの機会は極端に減少すると考えられる。住民同士が顔を合わせるのは、葬儀の時くらいである。

＜旅行など機会があったら行きたいと思いませんか？＞

男性）旅行はたくさん行ってきたのでもう行かない。
＜どこに行かれたんですか？＞
男性）海外は台湾、フィリピン、中国、ベトナム、インド、タイの方まで行ってきた。旅行仲間を作って、それで行ってきた。今は止めたけどね。今は海外には行きたいとは思わないな。
＜その仲間は、どんな仲間ですか＞
男性）地元で旅行の会を作ってさ。積み立てをして、旅行会社に申し込みをする。
＜何人くらいで行かれていたんですか？＞
男性）だいたい 10 人くらいで。海外旅行は 3 年位前までかな。それで、海外旅行は行くところがないからやめた。あと止めない人は国内の本州などに行っている。
＜行かなくなった理由はなんですか＞
男性）（妻を亡くして）一人になったから。

＜近所の方とは、いつも会ってるということはないんですね＞

男性）そうだ。ひと部落 25，26 軒しかないんですよ。だから皆会うというの

が葬儀のときだけ。

＜じゃあ、普段、定期的に会う人は、そんなに＞

男性）仕事のときとか、近くの人に会うけどね。定期的に会う人は、特別にいない。

対象者２は、現在の生活全般に対して不安を抱いている。彼の不安は、自動車が乗れなくなった時の生活への不安であったり、一人暮らしであるため、調子が悪くなった時の不安や孤独死への不安だったりする。また、対象者２の特徴は、他の対象者と比較すると周囲とのコミュニケーションの機会を喪失している点であり、これが不安の背景にあるとも考えられる。

＜こんなことやってみたいなと思うことはありますか？＞

男性）今更ないな。年をとって体がわるくなったら、すぐ入れる介護施設があればいいなと思うな。病気したら病院には入れるが、介護施設には入れない。やはりそれ（介護のこと）かな。一人だからどうしようもない。コロッと逝っても誰もわからないかもしれない。あちこちよくあるんだよ。

＜人が来てくれたらいいなとかありますか＞

男性）町に近ければ、病院とかそういう施設へ行けるけど。いつも車に乗れるわけではないし、バスもそんな回数があるわけではない。

対象者３（平取町居住）

対象者３は70代の夫婦であり、３年前までは、左官業を営んでいた。一時期は繁盛し、６～７人の従業員を抱えていた。夫婦が住む近隣の公民館や学校は全て手がけた。しかし、長びく不況で関連業者が倒産し、そこからの受注案件がなくなってしまった。そのため、数年赤字が続き、廃業届を出すことになった。対象者３の家のそばにはスーパーマーケットがあり、買い物には不便がないが、商店街や町は廃れていく一方である。

＜苫小牧まではどのくらいかかりますか＞

夫）１時間30分。だけどね、商店街でも地元地元と、いろんな券を出したりするが、向こうのほうが一箇所でみんな買える。それに安く買える。ここでもあるのはあるんだよ。薬屋で洋服売ったり、電気屋が金物置いてみ

たり。だけど、売れないんだ。みんな出て買うから。商店の人だって、向こうで買ってくるんだよ。我々のチラシには地元で買って下さいって。

この地域でも学校が閉鎖・統合される状況が続いているが、子供の数を増やすため、他の地域から親子で移り住む親子留学という制度を実施している。学費や家賃などの補助金がインセンティブになるが、小学６年生までの制度であるため、その後、いかに継続してこの地域に住んでもらうかが課題となっている。

＜この周りは、子供さんは多いんですか？＞

夫）それなんだよ。中学校も閉校、やめるということで、教育委員会では説明にね、町内会を集めてやったんだけど、親子留学っていう制度があるわけ。第一号で、野間さんが札幌から家族で来て、その人が代表となって、東京とか横浜とかへインターネットで流して、今、７軒か８軒来ているわけ。それで若いお母さんが子供連れてくるから、それで学校が成り立っているわけだ。

＜その留学はずっといて大丈夫なのですか？＞

夫）学費から家賃を補助している。だから来るわけさ。4 年間だったかな。

＜６年間いたら帰っちゃうんですか？＞

夫）帰んない方法をその６年間のうちにわれわれ住民も考えなければならない。居てもらうように。ところが仕事がない。

対象者３の夫は、働くということに積極的であり、とにかく色々やってみたいと考えている。しかし、居住地域の景気が悪く、なかなか仕事をすることが出来ないという状況を嘆いている。

＜これからこんなことしてみたいなということはありますか＞

夫）なんかね、あればだけど。自分からはさっぱり。どうしても年だからなという感じが入るわけさ。元気は元気なんだよ。まだ、普通の 70 代よりは元気だと思っている。

妻）年を考えたらね。

夫）俺はやってみたい。やらんことには進まないから。失敗は仕様がないよ。

ただ問題はね。仕事がなくなったからって、この年だったら、よほどの確約というのかな。そういうのがなければ金だって出してくれないのさ。今は。前なら使ってくれ使ってくれって。忙しい時期は。俺がやっていた商売の頃は。もう3年～5年くらいは吐き出しさ。これじゃどうにもならんということで、仕事がなくあきらめた。若い衆をかかえていると、絶対仕事はさせなきゃならんし、給料は払わなくてはならんし。

趣味はゴルフであり、趣味の会を作っているが、若い人が減っており、会員も減少傾向にある。また、冬には雪かきのボランティア活動をしているが、本人としてはお金のもらえる仕事の方に魅力を感じている。

＜仕事以外だと何かやってみたいことはないですか＞

夫）仕事以外ってゴルフくらい。
＜旅行とかは行かれませんか？＞
夫）旅行も若いときは沖縄とか。ゴルフでジャンボ会という会があって、そのジャンボ会で行った。今は会もね、若い人がゴルフしないし、また、若い衆もするくらい余裕がない。だから、若い衆も増えてもこないし、会員も50名近くいたのだけど、今18人くらいだよ。ゴルフはね。昔はすごい人だったよ。だから、我々みたいな会は、土日は来ないでくれと言われてたんだから。

＜冬になるとゴルフはできないですね＞
夫）ゴルフ出来ないから、一所懸命除雪して。機械があるもんだから。ボランティアで朝早くから。今年は雪が多いからね、結構忙しい。周りきれない。主にこの町内ね。いや。金でも貰うんならね、早く起きていってやるけれど、ボランティアだから、油代も貰えないんだから。缶ジュースくらいは貰えるけど。

この地域ではサークル等、趣味に関する活動が盛んで、妻もパークゴルフ・ビーチバレー等をしており、お茶のみ友達もいる。また、お祭りなどの行事も活気があることが伺え、周囲とのコミュニケーション機会も多い。

＜奥様は近所の方と交流されたりしているのですか？＞

夫）それはやっているよ。パークゴルフとか。あとは自治会のビーチバレーだとか。
妻）ちいさいふわふわしたボールで。１週間に２回。10時から１２時くらいまで。
＜お茶とかどこで飲んでますか。お友達と＞
妻）友達の家にお邪魔して飲んでいる。
妻）ハワイアンを習う場所がある。７，８人いるんじゃないかな。
夫）札幌とかで最初講習を頼んで習って、今はグループの中でやっている。
妻）カラオケとか陶芸とか趣味をもった人は結構いる。

＜お祭りなんかのときは集まるときは、たくさん集まるんですか？＞

夫）これは各町内会が当番になる。４０人か５０人で飾り付けをして。
＜どこでやるんですか？＞
夫）そこに神社がある。八幡神社。地元だけで、カラオケ大会とか。それから、いろんな部活がやっている人がいるでしょ、踊りだとか、子供のジャズダンスだとか、ハワイアンのグループとかがやる。
＜いろんなことをされている方が結構いらっしゃるんですね。
夫）陶芸とか、いろいろあるんだよ。

夫も積極的に活動したいと願っており、夢中になってやれるものを探している。特に夫の発言の中で多いのは、地域に活気がなくなっていくことの嘆きである。地域の発展を常に考えており、地域が寂れていくのをどうにかしたいと考えている。しかし、現状では対策はうまくいっていないということが悩みになっている。

夫）なんかいいのないかい。教えてよ。本当さ。夢中になってやるんならやる。どっかに用足しに行けとか書類作るとかはちょっと困るけど。
趣味は結構あるけどね。仕事がね。困ったもんだよ。急にね。国の制度が悪いのか。それに今回大惨事でね、田舎はいつになったら景気が良くなるのか、そういう気配もない。段々しぼんでいっている。だから、見切り

をつけて、年寄りになると、どうしても息子にしても娘にしても、札幌なり、苫小牧なり都会にいるからそっちにいっちゃうんだ。だから、段々ここはさびれていく。それが一番の悩みさ。だから、どうしたらいいかということを、自治会なり商工会の会議なんかでも話し合うんだけど、これといった特効薬がないのさ。

以上のインタビューを踏まえると、生活に対する満足・不満に影響する要因は大きく4つに分けることが出来る。1つ目は、同年代や他世代など、『周囲とのコミュニケーション機会』である。事前調査における移動販売車の利用には、買い物以外に周辺住民とのコミュニケーションという目的があるように思われた。また、パーソナルインタビューでは、80代の独居老人である対象者2は、妻の他界後、以前はあったという地域住民とのコミュニケーション機会をほとんど無くしていた。そして、体の調子が悪くなった時の不安や、孤独死への不安を抱えていた。周囲とのコミュニケーション機会の消失は、このような不安を増長させる要因になっているかもしれない。2つ目は、行事・イベント・地域づくりなど『町づくり活動の機会』である。対象者3は、とにかく夢中になってやれるものを探しているが、居住地域の景気が悪いという状況を嘆いており、地域が寂れていくのをどうにかしたいと考えている。町づくり活動の機会を充実させることは、余暇活動を充実させるとともに、地域が寂れていくという不安を取り除く機会にもなる。3つ目は、余暇を充実させるという点において『町づくり活動の機会』に類似しているが、趣味やボランティアなど『社会活動を行う機会』である。高齢者の社会活動の程度は、生活満足度と正の関係があると指摘されている (eg., 岡本 2008；金子 2009；竹内ほか 2011)。パーソナルインタビューでは、対象者1・対象者3は、趣味活動やボランティア活動など、社会活動を行う機会を持っている一方、対象者2はこのような社会活動を行う機会を持っていなかった。対象者1・対象者3は夫婦であり、対象者2は独居であるという違いはあるが、社会活動を行う機会の有無は、対象者1や対象者3が生活に不満や不安を顕在化させていない一方、対象者2は顕在化させている原因になっているかもしれない。4つ目は、買い物環境・移動手段・安否確認など『生活インフラの充実』である。生活インフラが整っていない場合には、年を重ねていくにつれて不満や不安が増していく要因になる。対象者1が住む地域に関しては買い物サービスが行われている事もあり、少なくとも買い物環境への不満に関する発言はなされていない。

6. 質問紙調査

6-1. 調査の目的と調査の方法

質問紙調査の目的は、パーソナルインタビュー結果の仮説を定量的に検証することにある。高齢

者が回答するには聞き取り調査が最も適していると思われるが、調査に要する期間の都合上、留め置き調査に近い方法をとることにした。具体的方法としては、コープさっぽろの移動販売車に買い物に来た住民に対して、質問用紙を配布する。それを自宅に持ち帰ってもらい、次に移動販売者に買い物に来るときに記入した用紙を持ってきてもらう。質問用紙の配布エリアは、貝塚店・岩見沢店・赤平店・夕張店・余市店の移動販売車がサービスを提供しているエリアであり、合わせて 200 枚を配布した。また、調査は 2012 年 5 月 14 日から 6 月 22 日の間で行われた。

6-2. 調査内容

調査票は、大きく 3 つの内容から構成した。

1. 居住地域に対する全体的な満足度

全体的な満足度については、以下の 2 つの設問を設定した。

・「現在生活されている地域について、どの程度、住みやすい地域だと感じていますか？」

・「現在生活されている地域について、どの程度生活環境に満足していますか？」

また、各設問は 5 段階（5. かなり住みやすい～ 1. かなり住みにくい、5. かなり満足～ 1. かなり不満）で測定した。

2. 居住地域で一層充実した生活を送るために必要な項目

パーソナルインタビューから抽出された「町づくりの機会充実」「生活インフラの充実」「活動機会の充実」「コミュニケーション機会の充実」に関わる 12 の測定項目を作成し、それぞれ重要度と満足度を 5 段階で測定した（5. かなり重要～ 1. まったく重要ではない、5. かなり満足～ 1. かなり不満）。

3. 居住地域に関する自由回答項目

自由記述回答として、以下の 3 つの項目を質問した。

・「あなたが住んでいる地域は、あなたにとってどのような存在ですか？」

・「現在の生活の中で、あなたが『不安』に感じていることをお教えください」

・「現在の生活の中で、あなたが『不満』に感じていることをお教えください」

また、調査票の最後で、回答者の年齢・性別・家族構成について回答してもらった。

6-3. 回答者の内訳

調査票の配布数が 200 枚だったのに対して、回収数は 196 件であった。うち有効回答数は 157 件であった。自由回答以外の調査票への記入漏れに関しては、無効回答として処理を行った。本研究は、主に過疎地に住む高齢者を対象としている。質問紙調査は年齢問わず配布をしたため、高齢者とは言えない年齢の回答者も含まれることになる。そのため、有効回答である 157 件から高齢者以外の年齢は省くこととした。一般的に、国内においても 65 歳以上を老年人口としていることから、今回は、65 歳以上の回答者をサンプルとして取り扱うこととした。結果、サンプル数は 112 件となった。回答者の年代・性別・エリアの内訳を図 5 ～図 7 に示す。また、独居は全体の 28.5％であった。

図 5. 年代

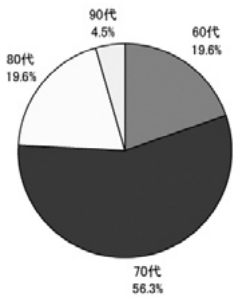


図 6. 性別

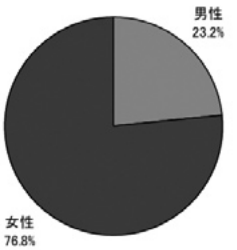
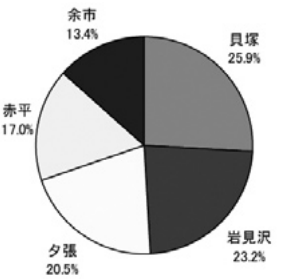


図 7. エリア



6-4. 居住地域に関する満足度

「どの程度、住みやすい地域だと感じていますか？」「どの程度生活環境に満足していますか？」という 2 つの設問に対する回答結果を図 8･図 9 に示す。これら 2 つの設問に対しては、いずれも「どちらかと言えば住みやすい」「どちらかと言えば満足」という回答が最も多くなった。「かなり住みにくい」は 2.7％、「かなり不満」も 2.7％であり、居住地に対して、それほど強い不満はあらわれていない。

図 8. 住みやすさ

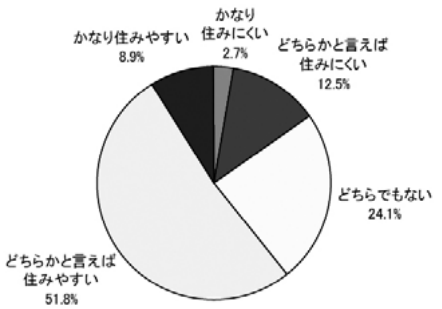
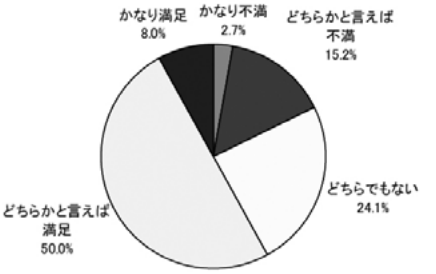
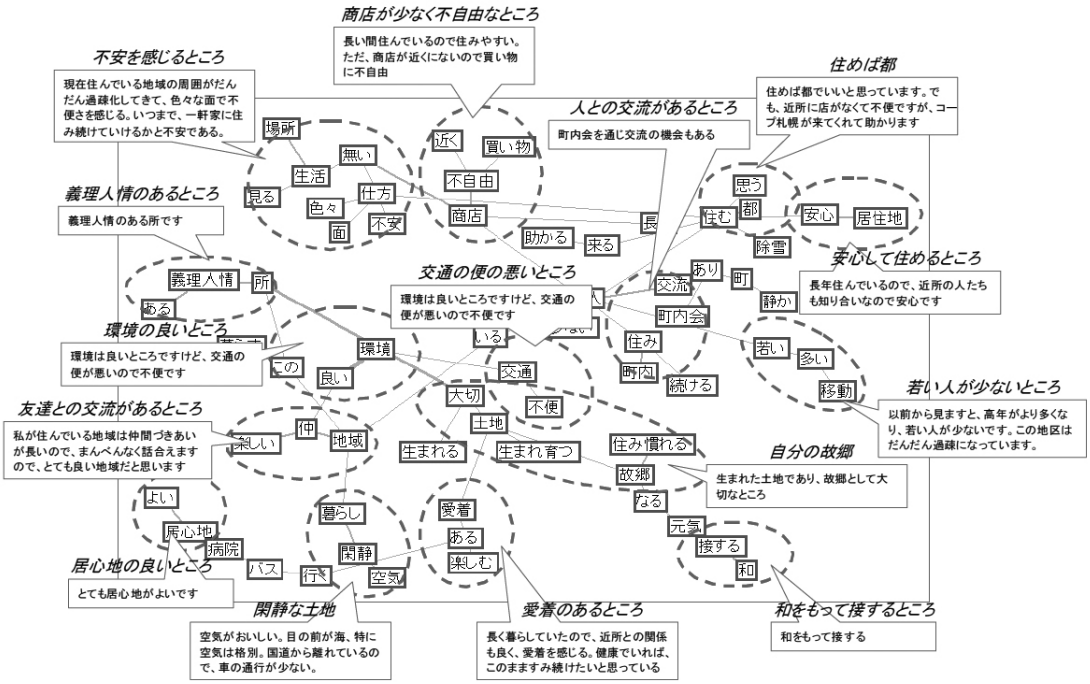


図 9. 生活に対する満足度



次に、住民が居住地に対してどのような感情を抱いているのかを確認するために、「あなたが住んでいる地域は、あなたにとってどのような存在ですか？」という自由記述設問に対する回答を検討する。自由記述の分析にあたっては、共起分析を行った。共起分析にはトレンドサーチ２００８（開発元 株式会社　富士通ソフトウェアテクノロジーズ）を利用した。共起分析とは、テキストに含まれる単語間の共起関係を明らかにするものである。具体的には , 文章中の高頻度単語を一定数取り出し、その中で共起度が高い単語を線で結びクラスタを作成する。共起分析の結果を図 10 に示す。

図 10. 住んでいる地域の自分にとっての存在



ポジティブな回答としては、「和を持って接するところ」「義理人情のあるところ」「友達との交流があるところ」「人との交流があるところ」といった『地域住民間の交流』、「自分の故郷」「愛着のあるところ」「安心して住めるところ」「居心地の良いところ」といった『感情的な愛着』、「閑静な土地」「環境の良いところ」といった『地域環境』に関わる内容が中心となった。一方、ネガティブな回答としては、「商店が少なく不自由なところ」「交通の便が悪いところ」といったインフラに関わる内容が中心となっている。全体としてはネガティブな回答よりもポジティブな回答が多い。この結果を踏まえると、居住地に対して、それほど強い不満が表れていないのは、長年、その地域に住んでいる住民も多いと考えられ、その土地に住みなれていること（その地での生活に慣れてい

ること）や、周辺住民のことも良く知っていることが背景にあることが要因の１つとして考えられる。

6-5. 生活満足度への影響要因

回答者は生活全般に対して、強い不満は抱いていなかったが、直接的に不安や不満について質問している（「あなたが「不安」に感じていることをお教えください」「あなたが「不満」に感じていることをお教えください」）。これらの回答は自由記述式であり、共起分析を行った。結果を図 11・図 12 に示す。

図 11. 不安に感じること

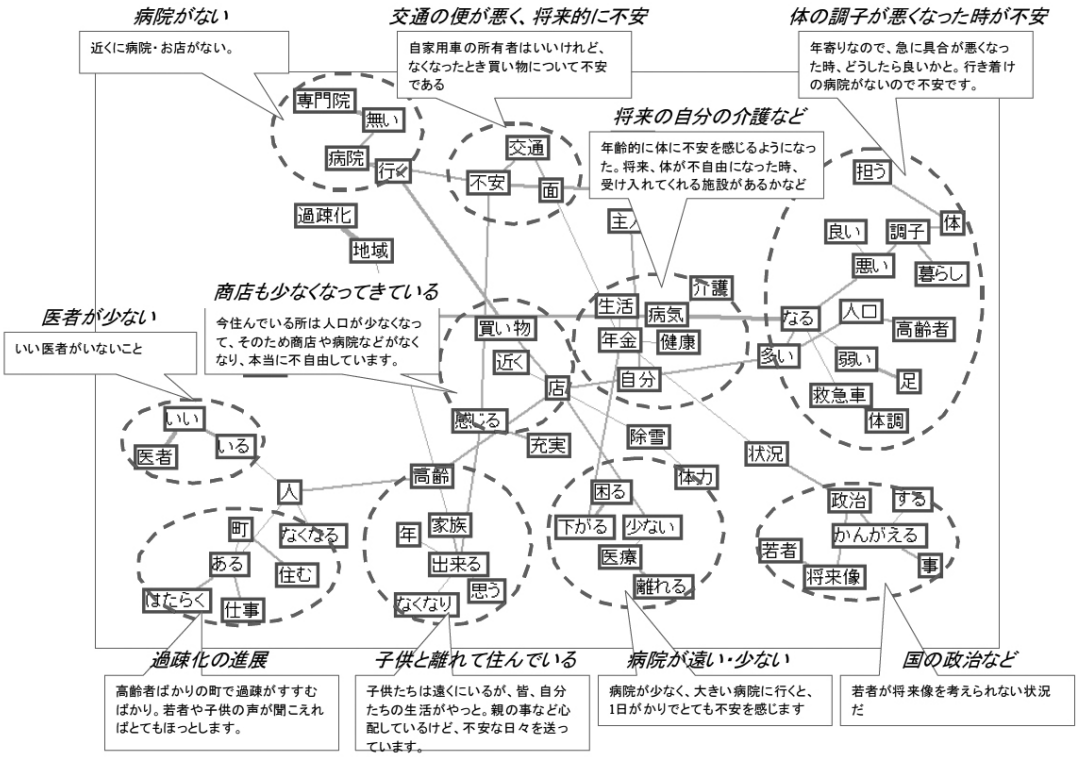
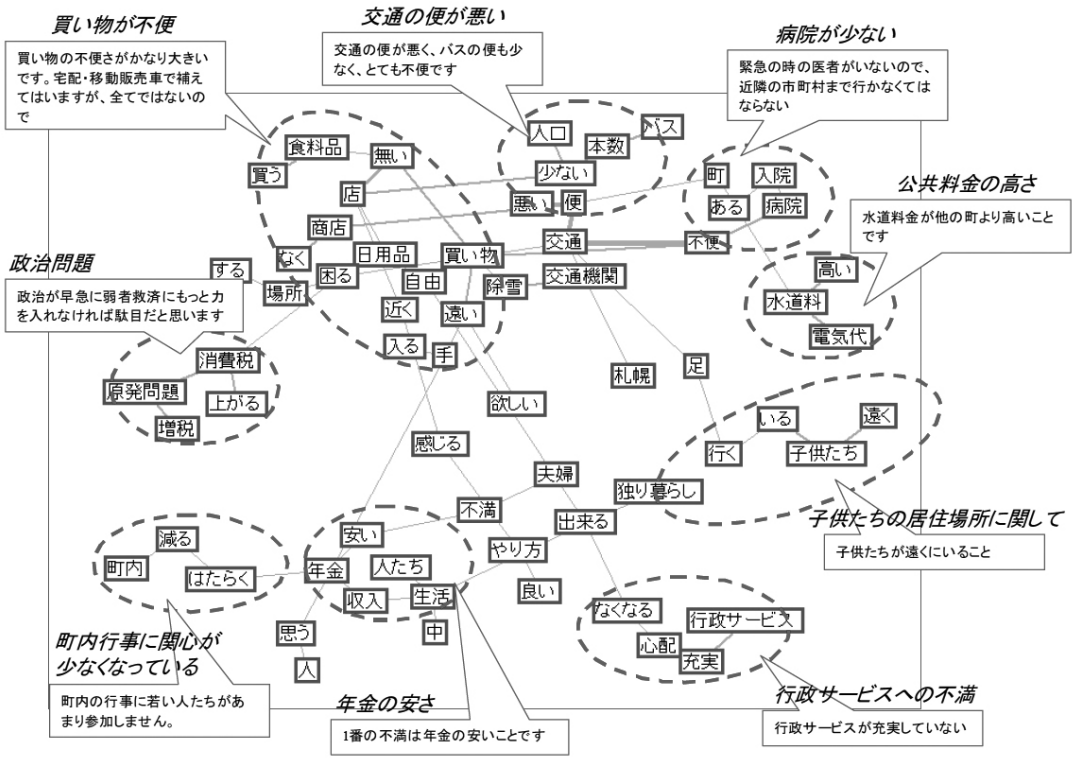


図 12. 不満に感じること



「不安と感じていること」「不満と感じていること」では、「交通の便」「病院の少なさ」「商店の少なさ」「医者の少なさ」といった生活インフラに関する不安や不満が中心になっている。また、このような生活インフラへの不安は、体調が悪くなった時や介護といった、自分の将来への不安にも繋がっているようである。国の政治・年金・行政サービスへの不安や不満も確認されるが、「町内行事に関心が少なくなっている」といった、町内イベントに関する不満も確認された。

6-6. 生活満足度への影響要因

調査票では、居住地域で一層充実した生活を送るために必要な項目として、12 の測定項目を作成し、重要度と満足度を 5 段階で測定した。まず、重要度と満足度の測定項目を使い、生活ニーズを得点化する。得点は（1）式で求められる。

生活ニーズ得点＝重要度×（6 －満足度）・・・（1）

ニーズの高さを示す得点は、重要度が高いほど、満足度が低いほど高い点数となる。得点が最も高くなるのは、その項目が「かなり重要（＝5)」である一方、「かなり不満（＝1)」である時で、

この場合には25点となる。一方､得点が最も低くなるのは､その項目が「まったく重要ではない（＝1)」一方､「かなり満足（＝5)」である時で、この場合には1点となる。得点を回答者ごとに算出した結果を表3に示す。

表3. 生活ニーズ得点

変　数	n	平　均	標準偏差	最小値	最大値
一人暮らしの安否確認など、安全対策活動の充実	112	10.74	4.47	3.00	25.00
日用品・食料品など、気軽に買い物できる商品の拡充	112	10.48	5.52	2.00	25.00
送迎サポートなど、移動手段の利便性の向上	112	10.29	5.12	1.00	25.00
住民が取り組む地域づくり・町づくり活動の機会の充実	112	10.14	4.46	3.00	25.00
住民が取り組むイベント（伝統行事や祭りを除く）の機会の充実	112	9.98	4.08	2.00	25.00
若い世代と接する機会の充実	112	9.81	3.86	2.00	25.00
宅配サービス／買い物代行など、買い物環境の利便性の向上	112	9.67	4.61	1.00	25.00
住民が取り組む伝統的な祭りや行事の機会の充実	112	9.30	3.87	1.00	25.00
ボランティア活動を行う機会の充実	112	9.24	3.94	3.00	25.00
学習活動を行う機会の充実	112	9.23	3.60	3.00	25.00
趣味活動を行う機会の充実	112	8.91	3.35	3.00	20.00
同世代と接する機会の充実	112	8.66	3.93	1.00	25.00

全体としては、「一人暮らしの安否確認など、安全対策活動の充実」「送迎サポートなど、移動手段の利便性の向上」「日用品・食料品など、気軽に買い物できる商品の拡充」といった『生活インフラ』に関連する項目の得点が高くなり、続いて「住民が取り組む地域づくり・町づくり活動の機会の充実」「住民が取り組むイベント（伝統行事や祭りを除く）の機会の充実」といった『町づくり活動』に関連する項目の得点が高くなった。

この結果は65歳以上の高齢者を対象としているが、回答者の年齢は90代までと幅広い。65歳以上が高齢者と定義されているが、国連の世界保健機関 (WHO) では、さらに65～74歳を前期高齢者、75歳以上を後期高齢者と定義している。60代と90代では大きな年齢の開きがあり、生活ニーズも異なってくることが予想される。そのため、前期高齢者と後期高齢者に分けた、結果を表4と表5に示す。

表 4. 生活ニーズ得点（前期高齢者）

変　数	n	平　均	標準偏差	最小値	最大値
一人暮らしの安否確認など、安全対策活動の充実	51	11.04	4.78	3.00	25.00
住民が取り組む地域づくり・町づくり活動の機会の充実	51	10.53	4.81	3.00	25.00
日用品・食料品など、気軽に買い物できる商品の拡充	51	10.45	5.68	2.00	25.00
送迎サポートなど、移動手段の利便性の向上	51	10.08	5.26	1.00	25.00
住民が取り組むイベント（伝統行事や祭りを除く）の機会の充実	51	10.04	4.20	3.00	25.00
若い世代と接する機会の充実	51	9.78	3.23	2.00	16.00
学習活動を行う機会の充実	51	9.51	3.72	3.00	25.00
ボランティア活動を行う機会の充実	51	9.31	3.72	3.00	25.00
趣味活動を行う機会の充実	51	9.20	3.07	4.00	20.00
宅配サービス / 買い物代行など、買い物環境の利便性の向上	51	9.12	4.57	1.00	25.00
住民が取り組む伝統的な祭りや行事の機会の充実	51	9.02	3.60	5.00	25.00
同世代と接する機会の充実	51	8.45	3.02	3.00	16.00

表 5. 生活ニーズ得点（後期高齢者）

変　数	n	平　均	標準偏差	最小値	最大値
日用品・食料品など、気軽に買い物できる商品の拡充	61	10.51	5.44	3.00	25.00
一人暮らしの安否確認など、安全対策活動の充実	61	10.49	4.21	3.00	25.00
送迎サポートなど、移動手段の利便性の向上	61	10.46	5.04	3.00	25.00
宅配サービス / 買い物代行など、買い物環境の利便性の向上	61	10.13	4.63	2.00	25.00
住民が取り組むイベント（伝統行事や祭りを除く）の機会の充実	61	9.93	4.02	2.00	25.00
若い世代と接する機会の充実	61	9.84	4.35	3.00	25.00
住民が取り組む地域づくり・町づくり活動の機会の充実	61	9.82	4.15	3.00	25.00
住民が取り組む伝統的な祭りや行事の機会の充実	61	9.54	4.10	1.00	25.00
ボランティア活動を行う機会の充実	61	9.18	4.15	3.00	25.00
学習活動を行う機会の充実	61	9.00	3.51	3.00	20.00
同世代と接する機会の充実	61	8.84	4.57	1.00	25.00
趣味活動を行う機会の充実	61	8.67	3.57	3.00	20.00

前期高齢者と後期高齢者では、上位項目に大きな違いはないが、前期高齢者は、「住民が取り組む地域づくり・町づくり活動の機会の充実」といった『町づくり活動』に関連する項目の得点が高くなっているのに対して、後期高齢者は『生活インフラ』に関する項目が上位を占めている。

次に、これらの項目と居住地への満足度との関連性を検討する。具体的な手順としては、生活ニーズに関する得点をもとに因子分析を行う。そして、因子分析により抽出された因子を独立変数、居住地への満足度を従属変数とした回帰分析を行う。まず、生活ニーズに関する得点に対して、因子分析を行い（主因子法･バリマックス回転）、共通性が 0.4 以下の項目（「同世代と接する機会の充実」「若い世代と接する機会の充実」）を削除し、再度因子分析を行った。因子分析の結果を表 6 に示す。

表 6. 因子分析の結果

因子負荷量行列（回転後）

変　数	町づくり活動ニーズ因子（因子 1）	社会活動ニーズ因子（因子 2）	生活インフラニーズ因子（因子 3）
住民が取り組むイベント（伝統行事や祭りを除く）の機会の充実	0.90	0.26	0.26
住民が取り組む伝統的な祭りや行事の機会の充実	0.74	0.16	0.32
住民が取り組む地域づくり・町づくり活動の機会の充実	0.74	0.28	0.25
学習活動を行う機会の充実	0.12	0.87	0.16
趣味活動を行う機会の充実	0.26	0.74	0.25
ボランティア活動を行う機会の充実	0.27	0.65	0.19
日用品・食料品など、気軽に買い物できる商品の拡充	0.30	0.21	0.72
宅配サービス / 買い物代行など、買い物環境の利便性の向上	0.22	0.05	0.76
送迎サポートなど、移動手段の利便性の向上	0.23	0.28	0.61
一人暮らしの安否確認など、安全対策活動の充実	0.17	0.39	0.57
固有値	2.29	2.17	2.14
寄与率	22.87%	21.72%	21.43%
累積寄与率	22.87%	44.59%	66.02%

因子分析により、3つの因子が抽出された。因子 1 は「住民が取り組むイベント（伝統行事や祭りを除く）の機会の充実」「住民が取り組む地域づくり・町づくり活動の機会の充実」「住民が取り組む伝統的な祭りや行事の機会の充実」であり、『町づくり活動ニーズ因子』と名付けた。因子 2 は「学習活動を行う機会の充実」「趣味活動を行う機会の充実」「ボランティア活動を行う機会の充実」であり、『社会活動ニーズ因子』と名付けた。因子 3 は「宅配サービス / 買い物代行など、買い物環境の利便性の向上」「日用品・食料品など、気軽に買い物できる商品の拡充」「送迎サポートなど、移動手段の利便性の向上」

「一人暮らしの安否確認など、安全対策活動の充実」であり、『生活インフラニーズ因子』と名付けた。

次に因子分析から抽出された因子を独立変数として、居住地に対する満足度との関連性を検討するために回帰分析を行う。従属変数には、居住地に対する満足度を示す指標として、「どの程度、住みやすい地域だと感じていますか？」「どの程度生活環境に満足していますか？」に対する５段階回答の合計値を利用した。全体（65 歳以上）及び前期高齢者と後期高齢者に分け回帰分析を行った結果を表７・表８・表９に示す。

表 7. 全体

変　数	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	F　値	t　値	P　値
町づくり活動ニーズ因子	－ 0.267	0.174	－ 0.135	2.337	-1.529	0.129
社会活動ニーズ因子	0.228	0.183	0.111	1.563	1.250	0.214
生活インフラニーズ因子	－ 0.768	0.191	－ 0.356	16.098	-4.012	0.000
定数項	6.786	0.166		1666.540	40.823	0.000

調整済みＲ二乗：0.13

表 8. 前期高齢者（65 歳～ 74 歳）

変　数	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	F　値	t　値	P　値
町づくり活動ニーズ因子	－ 0.448	0.209	－ 0.274	4.582	-2.141	0.038
社会活動ニーズ因子	0.007	0.236	0.004	0.001	0.028	0.978
生活インフラニーズ因子	－ 0.931	0.257	－ 0.458	13.126	－ 3.623	0.001
定数項	6.957	0.214		1058.424	32.533	0.000

調整済みＲ二乗：0.22

表 9. 後期高齢者（75 歳以上）

変　数	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	F　値	t　値	P　値
町づくり活動ニーズ因子	－ 0.189	0.310	－ 0.083	0.372	－ 0.610	0.544
社会活動ニーズ因子	0.368	0.305	0.162	1.462	1.209	0.232
生活インフラニーズ因子	－ 0.604	0.284	－ 0.271	4.503	－ 2.122	0.038
定数項	6.653	0.251		700.720	26.471	0.000

調整済みＲ二乗：0.06

前期高齢者と後期高齢者では、有意となった因子に違いが表れた。前期高齢者に関しては、「生活インフラニーズ因子」「町づくりニーズ因子」が1%水準で有意となった。一方、後期高齢者に関しては、決定係数は低いものの「生活インフラニーズ因子」のみが1%水準で有意となった。この結果は、生活ニーズ得点において、前期高齢者は、『町づくり活動』に関連する項目が上位であったのに対して、後期高齢者は『生活インフラ』に関する項目が上位を占めていたことと一致する。

7. まとめとインプリケーション（過疎地における小売戦略の方向性）

スーパーマーケットに代表される小売業は、住民の生活に最も深く関わっている業態である。過疎地住民の生活に関わる社会貢献活動は、住民の生活満足度の向上によって、最終的には企業の収益にも反映されるはずであり、小売業にとっても収益上のメリットは大きい。ただし、社会貢献活動であっても、地域住民のニーズをベースにしたものでなければならない。本研究では、北海道の過疎地を対象に、主にパーソナルインタビュー・質問紙調査から住民ニーズを探り出すことを試みた。調査の結果、居住地域に対して愛着を感じていることが示された。これには、その土地に住み慣れていることや、周辺住民のこと良く知っていることが背景にあると考えられる。高齢者にとっては離れがたい土地であるため、満足度の高い環境づくりが必要になってくる。

本研究では、パーソナルインタビューの結果から、過疎地住民のニーズとして、『周囲とのコミュニケーション機会』『町づくり活動の機会』『社会活動を行う機会』『生活インフラの充実』といったニーズを抽出し、質問紙調査で定量的に住民ニーズを検討した。結果、生活満足度には、前期高齢者・後期高齢者とも共通して、生活インフラに対するニーズが有意に影響することが示された。生活インフラに対するニーズには、買い物環境・移動環境に対するニーズだけでなく、独居老人の安否確認といった安全環境に対するニーズも含まれる。一方、地域づくりやイベントとった町づくり機会に関するニーズは、前期高齢者のみで生活満足度に影響していた。後期高齢者は体力的な問題から、イベントなどにはそれほど強い興味を示さないと思われる。

過疎地における高齢者世帯では、将来的に車を運転できなくなった時や、歩行が難しくなった時が悩みの種となっており、買い物環境や交通手段の利便性向上への要望が強い。このようなニーズに対応しているのが、例えば、コープさっぽろの「お買い物バス」であろう。高齢者の要望に応え、利便性を向上させるには、小売は提供するサービスを買い物環境に留まらず、生活全般のサポートに拡充していくことが必要となる。例えば、本研究のインタビュー対象者はインターネットの活用は難しいものの、FAXを活用しており、一部の商品に関してはFAXを通じてオーダーをしていた。宅配サービスや高齢者への御用聞きサービスなどは、FAXを通じたやりとりなどが効率的であるし効果的であるかもしれない。また、高齢者に対する安全対策活動もニーズが高かった項目である。様々な事業者が、独居老人の安否確認をサービスやボランティアで行うようになってきているが、

特に独居老人の不安が大きい過疎地においては必要不可欠なサービスであろう。

前期高齢者でのみニーズが高かったのは、地域づくりやイベントに関する活動の機会であった。パーソナルインタビューで示されたように、住民は居住地域が寂れ、活気がなくなっていくのを悩んでおり、どうにかしたいと考えていた。住民が地域づくりに取り組んだり、イベントに取り組んだりするのは、過疎地の活性化を促すだけではなく、地域コミュニケーションの活性化を促すことにもつながるだろう。小売としては、住民の地域づくり活動に対して協賛を行うような間接的な貢献も出来るであろうし、直接的に小売自体が主体となって取り組むことも出来るかもしれない。全国の各地域では官民協働の市民参加を前提とした官民協同の地域づくりが進められているが、地域づくりに参加する住民と行政との間で円滑なコミュニケーションがとれていないのが実情である(eg., 大西・富澤 2011)。さらに言えば、過疎地における中小規模の商店や商店街の低迷は、大型小売店の影響も大きい。従来、中小規模の商店や商店街は、その地域のまつりや伝統文化など、地域社会への貢献を通じて、地域コミュニティの中心としての役割を担ってきたが、過疎地ではその役割を担ってきた商店はなくなりつつあるのが現状である。したがって、過疎地を活性化していくには、過疎地でサービスを提供する大型小売店が、地域づくりに関わる役割を担う必要があるだろう。

8. 研究の課題と限界

本研究における課題は次の4点である。1点目は、本研究における調査対象地域は北海道に限定されている。そのため、本研究の結果を一般化するためには、他地域の過疎地を対象とした調査が必要であろう。2点目は、本研究では、パーソナルインタビューから導かれた仮説をもとに質問票を作成している。しかし、パーソナルインタビューの対象者は3世帯のみであり、定性調査であることを踏まえたとしても、対象者数は多いとは言えず、全ての生活ニーズが抽出されていない可能性もある。3点目は、本研究における質問紙調査の無効回答者数は40件程度あり、比較的多い数となった。調査対象が高齢者であり、アンケートの回答に負荷を感じたかもしれず、高齢者に対するアンケートの実施の仕方に関しては今後の課題としたい。4点目は、今回抽出された住民ニーズはどちらかと言えば顕在化したニーズであり、潜在的なニーズまではくみ取ることが出来なかった。潜在的なニーズはモチベーションリサーチにより抽出が可能であるが、高齢者が対象であったため、回答者に対して負荷の大きいモチベーションリサーチを実施することは出来なかった。住民ニーズをベースにしたサービス提供を行うにあたっては、顕在ニーズに加えて、潜在ニーズも把握しておく必要があるため、この点も今後の課題としたい。

参考文献

大西津子・富澤浩樹（2011),「まちづくり現場での問題解決を前提とした「まちづくり学習」の設計と運用－インタビュー実習工程を導入した講座の提案－」,『地域活性研究』,2,3-15.

岡本秀明（2008),「高齢者の社会活動と生活満足度の関連－社会活動の 4 側面に着目した男女別の検討－」,『日本公衆衛生雑誌』, 55（6),388-395.

香川幸次郎・中嶋和夫・芳賀博（1998),「高齢者の社会活動と生活満足度の関係」,『日本保健福祉学会誌』,5（1),71-77.

金子勝司（2009),「豪雪過疎地域における冬期の社会参加事業の検討」,『共栄学園短期大学研究紀要』25,177-196.

竹内香織・磯和 勅子・福井享子（2011),「地域高齢者における主観的幸福感に関連する社会活動要因」,『三重看護学誌』, 13,23-30.

古谷野亘（1993）,「在宅養護老人のソーシャル・サポート・システムー階層的補完モデルと課題特定モデルー」,『桃山学院大学社会学論集』,24, pp113 － 124.

「人口統計資料集」,国立社会保障・人口問題研究所 , http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/Popular2012.asp?chap=0,2012.7.10.

---

[i] 総務省地域力創造グループ過疎対策室 ,「過疎地域等における集落の状況に関する現況把握調査 報告書（平成 23 年 3 月）」.
[ii] 北海道「過疎地域・高齢化集落状況調査報告（平成 23 年 8 月）」
[iii] 北海道「北海道過疎地域自立促進方針 (平成 22 ～ 27 年度)」
[iv] 「夕張市の歴史」, 夕張市ホームページ,
http://www.city.yubari.lg.jp/contents/compendium/index.html,2012.7.1.
辻 道 雅 宣（2010),「夕張市の財政破綻の軌跡と再建の課題」,自治総研
[v] 「赤平市の歴史」, 赤平市ホームページ, http://www.city.akabira.hokkaido.jp/sidemenu/shisei.html,2012.7.1.
[vi] 岩見沢市「過疎地域自立促進市町村計画 (平成 22 ～ 27 年度)」
[vii] 厚岸町「過疎地域自立促進市町村計画 (平成 22 ～ 27 年度)」
[viii] 仁木町「過疎地域自立促進市町村計画 (平成 22 ～ 27 年度)」
[ix] 平取町「平取町森林整備計画」
[x] 人口、面積、人口密度のランキングデータ http://rnk.uub.jp/, 2012.7.5.